

郷土の文化財シリーズ 八

昭和五十年三月

佐久市下前田原古墳群等学術発掘調査概報

佐久市教育委員会

佐久市下前田原古墳群等学術発掘調査団

顧問	一志 茂樹	長野県文化財専門委員長・信濃史学会会長
〃 故	藤森 栄一	長野県考古学会会長・諏訪考古学研究所長
〃	原 嘉藤	松本市教委嘱託・東筑摩郡志編纂主任
団 長	与良 清	小諸市誌編纂主任・県考古学会員（歴史・民俗）
副 団 長	白倉 盛男	佐久市文化財調査委員・小諸市立火山博物館長（地質）
調査主任		
（調査担当者）	土屋 長久	御代田町教委社会教育主事・日本考古学協会員
調査員	宮坂 光昭	県考古学会委員・諏訪考古学研究所員
〃	金井 重忠	望月町大伴神社・県考古学会員（祭祀）
〃	佐藤 敏	県考古学会員・佐久市岩村田相生町
〃	武藤 金	〃 ・佐久市平賀
〃	畠山 富雄	〃 ・佐久市三塚
〃	井上 行雄	〃 ・佐久市岩村田相生町
〃	三石 延雄	〃 ・南佐久郡白田町入沢
〃	森泉 好治	〃 ・佐久市岩村田
〃	藤沢 平治	野沢北高校教諭・県考古学会員
〃	森泉 定勝	佐久考古学会員・佐久市岩村田荒宿
〃	青木 幸男	明治大学文学部学生
〃	臼田 武正	信州大学教育学部学生
〃	高村 博文	信州大学繊維学部学生
調査団事務	河西 清光・会田 進（諏訪考古学研究所）	
調査事務局	細萱 勇美	佐久市教育委員会 教育長
〃	小山 英吉	〃 前教育次長
〃	荻原 卓治	〃 教育次長
〃	西田 米夫	〃 前社会教育課長
〃	高畑 五男	〃 社会教育課長
〃	小林 要次	〃 前社会教育係長
〃	桜井 長夫	〃 社会教育係長
〃	木内 捷	〃 社会教育係

序

佐久平には、豊富な古墳や古代遺跡が分布し、古代人の生活について貴重な資料を提供しています。その保護対策に近年開発の嵐が情容赦なく吹き荒さぶなかで、残されたこれら重要な遺産を、後世に伝え、また保護していかねばならない責務を痛感いたしております。

下前田原古墳群は、幸いにもブルの鉄爪の中に、影を失うことなく県下でも、極めて希な学術発掘調査を為し得ました。

灼熱の八月より、野菊咲き乱れる十月までの長期間に亘り、終始調査担当者として、密度の高いエネルギーな調査をいたゞいた御代田町教育委員会の土屋長久先生（日本考古学協会会員）、調査団長をお引受けくださった小諸高校講師与良清先生、副団長の小諸市立博物館長、白倉盛男先生、佐久考古学会員の諸先生方の参加を得ることができました。

調査の結果、古墳の天井石は破壊されてはおりましたが、佐久地方特有な豊富な玉類の出土、また県下でもあまり例のない墓前祭のとり行なわれた遺構等を検出、多くの成果を収め得ましたことは、種々の悪条件のなかで、学問の探究心なくしては、この金字塔はうちたてられるものではありません。

今後古墳は復原保存し、本書と併せて、佐久平の古代史究明のため活用されることを期待します。

おわりに、調査指導に遠路何回となくお出でいたゞいた諏訪考古学研究所のみなさん、宮坂光昭先生、県教委指導主事桐原健先生、直接調査担当にあらずさわって下さいました各位に深甚の敬意を捧げるものであります。

昭和四十七年十月

佐久市教育長 細 萱 勇 美



下前田原古墳群、後原1号墳の墳丘及び羨門部（上）
後原2号墳全影（下）

祭祀ある古墳の一例——下前田原古墳群——

土屋 長久

一

佐久平は千曲川流域における火山灰の地質『田切り地形』からなり、この地域では、後期古墳群は著しい分布をなしている。隣接する上野国方面、あるいは古道（東山道）で連なる諏訪方面とも文化的交渉が多いとされ、種々問題点があげられている。

筆者は昭和四十七年八月二十日～九月三十日まで佐久市下前田原古墳等の調査を実施し、このうち二基の古墳に墓前祭祀が認められたので紹介したい。

佐久平北部の第Ⅰ地区（註1）には古墳数七三基をかぞえ、この地の古墳の調査は、佐久市が国士館大学大川清氏に委託して行なった皎月古墳（報告書は近刊、ただし古墳は六分之一にして蓼科工場に復元）、小諸市芹沢古墳（註2）等が知られているにすぎなく、佐久平の東端における古墳の構造及び副葬品からの埋葬者の性格を追求する意味で重要な位置を示している。

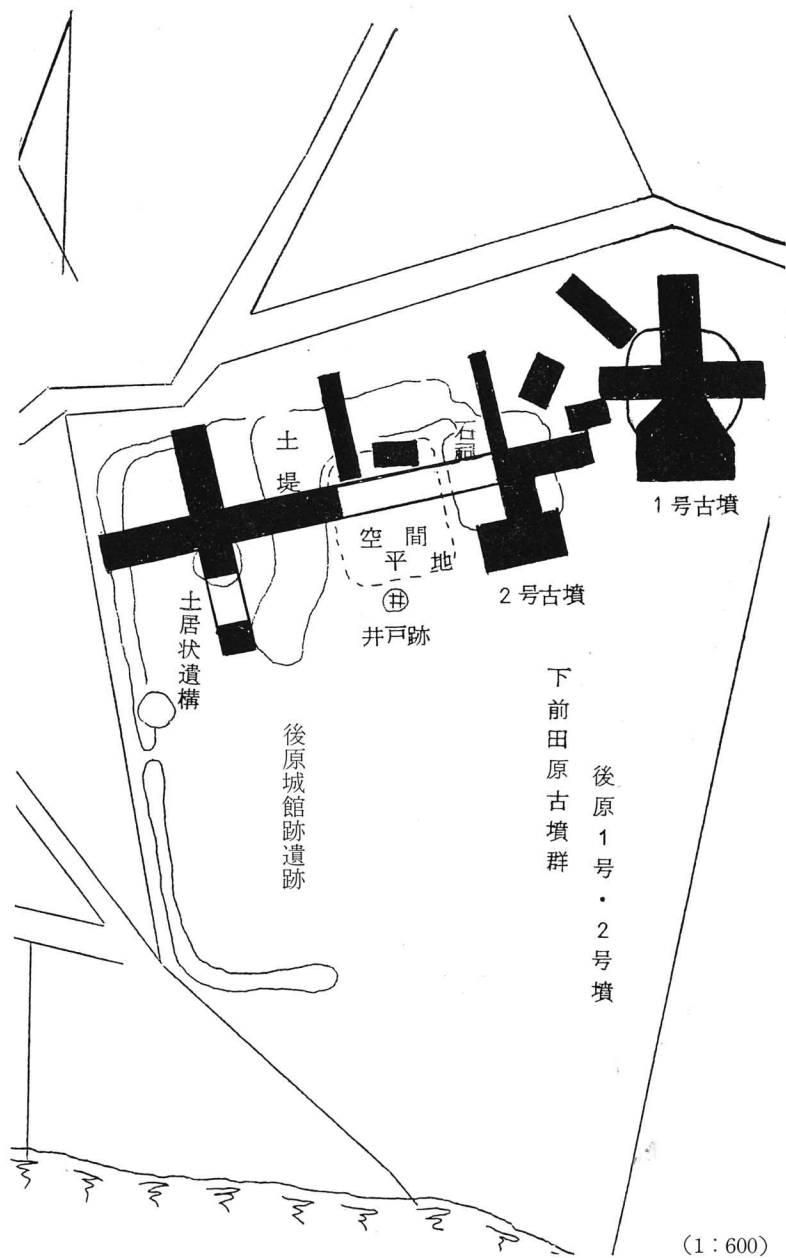
皎月古墳は昭和四十四年三月に調査され、（註3）古墳は直径約二二m、高さ四mの円墳で外側に埴をめぐらし、中央に大きな石を組みあわせて石の部屋を作り墳丘の中腹に五〇～七〇cmの高さに河原石を石垣の様に積んだ、外

護列石をなし、石室の中にはおよそ三人を順次葬ったもので、石室は、はなはだしく破壊されていたが精査の結果、金銅製の金環、ガラス小玉、土器類が検出された。羨門の外側の左右には多数の須恵器、土師器が供物を盛った様におかれ、その中に直刀一振が発見された。この古墳は年代的には、七世紀末から八世紀、また九世紀にわたって追葬がなされたと考えられ、この古墳での外護列石は我国では類例が極めて少なく、類似した古墳が群馬県で見られるものの、韓国南部地方にみられる当時の帰化人系の墳墓の一つではあるまいかと推定されている。さて、ここに古墳祭祀を考える上で、墓前祭の一例と考えられる下前田原古墳群を紹介したい。

二

佐久平における祭祀遺跡のあり方は、峠路の入山峠、瓜生坂、雨境峠、白樺湖畔が従来知られ、遺跡の立地からは信濃路における山岳信仰の峠神奉斎の性格をよく示している。ことに入山峠祭祀遺跡の年代は五領期末から、和泉期初頭へかけての土器に伴出し、瓜生坂での終末期まで祈りがこめられた。「古東山道」筋の祭祀遺跡は峠神の信仰にまつわるものでなく、大和朝廷の東国経路に由来する特殊な意味も含まれるが、この山国の各所に集落が営なまれ、農耕に従った古代の村人たちのおりおりの祈りの跡もあった。佐久平では、片貝川流域の大門下、後沢、泉小学校庭、大沢等の湿地帯の諸遺跡(註4)、また近年調査を実施した、中道遺跡内からも碌(口径一〇・一cm、高さ一一・三cm)の祭器の検出をみている。さらにこれ等古代の豪族は、彼等の墳墓へも祈りをこめた(註5)。

前述した皎月古墳の遺品のあり方から古墳祭祀でも古墳築造後の墓前祭的な、あるいは年代が降下し氏族の追葬儀礼の「おまつり」と理解できよう。



第1図 佐久市小田井下前田原古墳群及び後原城館跡遺跡、調査遺構全体図

下前田原古墳群(註6)は佐久市大字小田井(旧御代田村)に所在する。信越線御代田駅より西南3kmに位置する。通称前田原(めいたばら)と言ひ、水田地帯の北側、信越線の北側の田切り地形上に立地している。遺跡は、土居状遺構、信仰塚九基、古墳五基(内後久保に三基)からなり、皎月古墳等合わせ古墳群の一支群として下前田原古墳群と仮称して扱った。この地は、信越線北岸標高七五〇mの山林内に所在する。

浅間山南側の佐久平北部は、火山灰流が堆積し、田切り地形が断崖をなし、後原古墳一、二号墳及び皎月古墳はこの田切り台地上に位置し、後久保一、三号墳は、やゝ低い平地となっているが、この田切り間の低地の水田開発は早くから水田として拓けたようである。ことに西屋敷付近は、佐久平古墳群の東限界分布となっており、いわば、古豪族の住んでいた東の端といえる。他に御代田町内では、浅間山麓、馬瀬口に五、塩野に三、西屋敷では「野火付」「かに沢」の「とやづか」湯川ぞいの一本木の「金塚」の三基が従来知られていた。またこの前田原の南方には曾根城址、東方に小田井城址、小田井に東山道長倉駅家址が位置し、古東山道途上でもあり、上代から早く拓かれ、長倉牧、塩野牧がおかれ、小沼郷、中世に下って前田原郷の存在など佐久平北部では早くから拓けた地域といえる。付近の地籍は俗古屋敷、前田屋敷(ぜんたやしき)西屋敷と称され、たぬきと老婆の伝説等が言い伝えられていた。また古墳群の北側の古道は、下前田原から平原へ通過した古道である(註7)。

古墳二基、土居状遺構、信仰塚にそれぞれA・B Tを入れ遺構検出を行なった結果は次の第1図、第1表のとおりである。

第一号古墳は田切りにより南端は断崖をなす南端に立地し、ややわずかな傾斜地の自然微地形である。墳丘は南北径一六・二m、東西径一三・五m円墳で現高は一・七五mを計り、略完存の墳丘といえるが、南側は、やゝ盗掘を受けた跡がみられる。墳頂には天井石二個が露出していた。発掘作業は東西、南北に主体部付近を中心にA、B

トレンチを設定し検出を行なった。横穴式石室は、傾斜地の地山を利用して、石室主体部を消平し構築されている。

内部構造は、横穴式石室で南に開口し、片袖式（入口より右側に袖がある）となり、天井石が玄室及び羨道内におちこみ露出した。羨門は、二段積で入口両側には、長さ二・八mの列石を左右に構築していた。玄室幅一・三〇一・二m、東壁一・六m、西六m、最大幅一・六五m、奥壁幅一・三〇一・二m、東壁一・六m、西壁一・二m、羨道〇・九八m（床より）を計る。墳丘は二段の円形サークルの列石で土どめして検出され、きわめて浅い周溝（幅五m）が検出された。前庭部分からは、墓前

第1表 佐久市小田井下前田原古墳群等遺跡出土遺物一覧表

時代	遺構名	型式	主要遺物
古墳時代 後期	1号墳（円墳） 高塚式、片袖式 石室プラン	終末期	土師器坏形、高坏 須恵器、かめ、壺いづれも破片（前庭部より） 鉄鍬片
	墳丘上及び前庭部 付近の軽石による 積石下より	近世以降？	馬の骨
同上	2号墳（円墳） 高塚式、両袖式三 味線胴張りプラン	終末期	須恵器坏形、壺他 土師器高坏、他 人骨3体分以内、直刀、鉄鍬、切子 玉、白玉、ガラス玉
	開口した石室を利用し 石室内上部に軽石の積石2カ所 あり	中世以降	墳丘上より、土鍋片、寛永通宝
鎌倉以降	土居状遺構 （城館跡）	中世以降	土居状裾野より、土鍋様土器、前山 焼井出土
中世以降 及び近世 初頭	塚	13塚(?)	土師器片

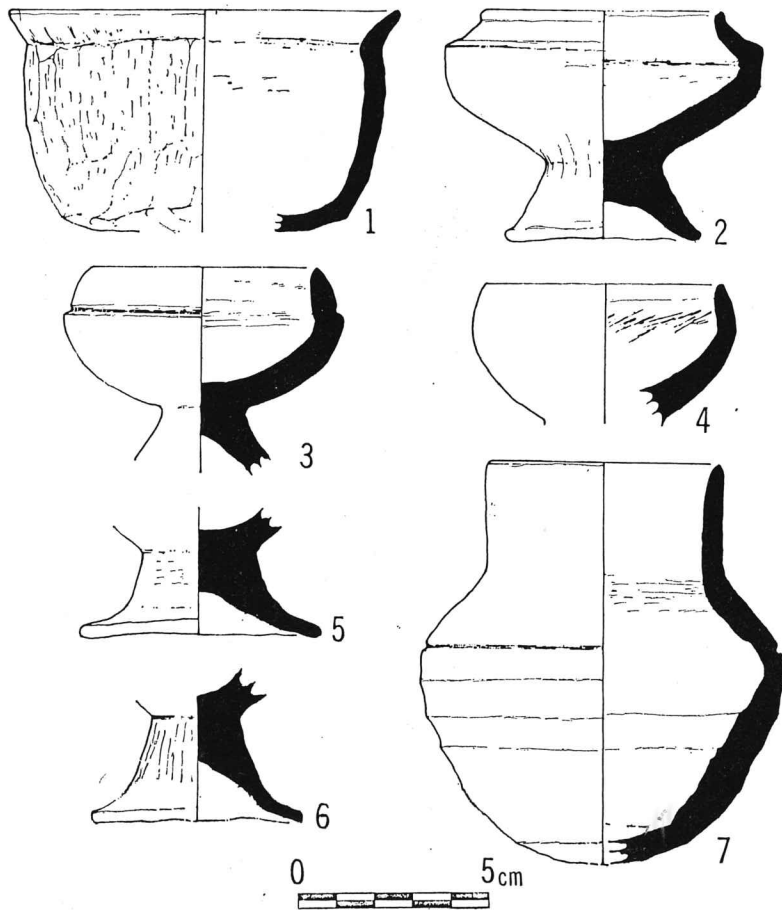
第2表

番号	出土位置	口径	器高	底径	胎土	成 形	焼成・色調	備考
1	2号墳前庭中央部	10.3 ^{cm}	5.9 ^{cm}	— ^{cm}	白砂を 含む	外面口径削り上なで底 部静止口径削り	外、橙褐	
2	2号墳前庭東側	6.4	5.9	5.1	良質	上部ヨコヘラミガキ 下部タテミガキ	外、茶褐 堅	半欠
3	〃	5.9	—	—	〃	上部ヨコヘラミガキ	外同上	〃
4	〃	5.2	—	—	〃	〃	〃	破片
5	〃	—	—	6.3	—	下部ヨコヘラミガキ 底部回転口径削り	黒茶褐堅	〃
6	〃	—	—	5.5	良質	〃	〃	半欠
7	2号墳前庭西側	6.1	10.6	—	細石粒 多含	内多なで仕上	濃灰色	〃

に祈り、用いられたであろう土器・須恵器片が一面に発見されたが、石室内からは遺物は検出されなかった。

第二号墳は、第一号墳から三^m離れ、構築されたもので同様な地形を利用し構築されている。ただ墳丘は次の新しい時代の構築造成を受けたであろうか、墳丘は方形をなしており、北側裾は、西方に存在する土居状土堤と接しているのが観察される。墳頂の西側には、近世末の屋敷神を祭祀した石祠が散在し、さらに頂上は平に消平されている。墳丘は東西一二^m、南北一二・五^m、墳丘現高に一・二^mを計る。内部構造は、横穴式石室で、南に開口し、両袖式玄室で、両側壁が三味線胴張りをとるものであるが、天井石は全てなく、すでにとりのぞかれた後、再び遺構としてうめられて利用されたものである。玄門は内部高さ〇・九^m、幅〇・七三^m、まぐさ石、かまち石が残る。羨道部も笠石がくずれおちた他、塞閉石が残っていて、土師器、須恵器片が散在する。玄室入口幅一・七五^m、長さ三・〇五^m、最大幅二・〇^m、奥壁幅一・三^m、奥壁高さ一・一〜一・四^mを計る。墳丘は特別な一号墳にみられる円列石はなく、わずかに裾部分に小礫（軽石の）がみられる。尚墳丘上の東側には径五五×五七^{cm}の柱穴もしくは袋状ピットが発見された、そこ

からは、中世土鍋片が発見されている。石室上部はおそらく開口していて、中世頃この石室を利用したが、上部に軽石による積石が二個所みられている。石室内からは礫床上一〇〜二〇cmの面より人骨三体分が検出されている。礫床は鉄平割石及び河原石を敷き、この上より切子玉、ガラス小玉等が発見されている。前庭部は幅六m×一・八mの長方形状列石がみられ、墓前祭がとり行なわれたであろう遺物が多く散在していた。



第2図 後原2号墳前庭部出土土器実測図

調査の結果二基共に同一時期であり、しかも一号古墳の羨門部は、皎月古墳の構造に似て外護列石は墳丘を外周せず羨道と垂直に幅六・八 m 、二段の石積をなし、それにより、 \bigcirc ・八 m 離れた前庭に \bigcirc ・四八 \times \bigcirc ・四二 m の範圍で敷石施設があり、その周圍には土師器、須恵器が破碎され埋置されていた。これに対し二号墳でも前庭部分のあり方は、羨道部入口部分は同様で、前庭には幅一・一 m 、長さ五・九 m の長方形状に、こぶし大の軽石及び河原石を列石状となし、祭壇となしていた。遺物は多量の土師器、須恵器が一号墳同様に破碎され埋置された状況で見され、破片は祭壇の西側、羨門部付近、中部、東側と三グループに密集的な分布を示し、東及び西側の破片は前庭上五 \sim 八 cm 上の黒褐色土層中に埋置されて検出されている。

図示した(第二図)遺物は二号墳出土のものでその一部で、1の甕形土器は前庭中央部、2 \sim 6の小形高坏は前庭部東側からひとかたまりとなって検出され、7の須恵器は前庭部西側からの出土品で、1が前庭部床上の他2 \sim 7は五 \sim 八 cm 高い、黒褐色土層に埋置され出土した。器物の形況は第2表に示したが、土師器は鬼高期に、2 \sim 6の内外面黒色塗りの小形品は、平安時代中期 \sim 末期に降下し、7の須恵器も同じであらう。

一号墳では、A・B・Tのほか全面墳丘を清掃したが、墳丘裾部及び周溝には焚火跡及び遺物は検出されなく、葺石からも同様であった。古墳での地層は大きく三層に、つまり、墳丘構築以前・構築途上・構築後に分類できるように見え、構築後にあつては中世 \sim 近世に及び、両古墳共、墳丘以前層は二号墳下では全く検出されなかったが、墓前での祭りに用いられた遺物の破碎された埋置状況は五 \sim 一〇 cm にわたり、構築直後さらにはそれ以降までひきつ

づき墓前祭がとり行なわれた様である。(註8)

一・二号墳の構築時期については、墳丘の接する部分も墳丘裾現地形で約一〇・四mを離れ、一号墳に周溝が構築されたのに対し、二号墳からは検出されず、距離的にも重複は認められず同一時期の構築とすべきであろう。

従って両墳の被葬者に対する祭礼は、墓前が祭祀の場といえるのではあるまいか、そしてその年代は前述した遺物でもふれたが、平安時代中期まで、行なわれたのではあるまいか。

古墳が祭祀の対象となされることはすでに先学諸兄の説くところであるが、しかしその実態は必ずしも把握されておらず、種々の現象によって形態があり、墳丘のすべてを祭祀の場として構築し、埋葬の場をこれに接して構築している調査例があるが(註9)、皎月古墳、下前田原一・二号墳の場合、前庭部を祭祀の場となし、検出された遺物から、祭祀終了後その祭器を遺棄した場所とはいえ、構築及び構築以前ひきつづいて祭祀がなされたケースといえよう。

今夏の下前田原古墳の調査では、これ等種々の祭祀様相を整理し、改めて参加調査員諸氏と討議し、第二次補充調査をなし正式報文に望みたいと考えている。佐久平では古墳調査例が少なく、さらに古墳祭祀の一例であるので先学諸氏のご教示を賜りたく紹介した。尚下前田原古墳群は佐久市で復元として保存されることである。

註1、土屋長久「信州佐久平の後期古墳群について」『信濃』二二ノ五。

註2、与良清・土屋長久「小諸市与良芹沢古墳副葬品の様相」『長野県考古学会誌』第一四号。

註3、同古墳には筆者も参加したが、佐久市文化財調査委員竹内恒氏の御教示による。

註4、藤沢平治・土屋長久「佐久盆地における祭祀遺物について」『長野県考古学会誌』第一二号。

註5、 梶山林継「祭と葬の分化——石製模造遺物を中心として——」『日本文化研究所紀要』第二九輯。宮地治邦『神祇史概論』神社新報社。

註6、 佐久市教育委員会「佐久市大字小田井下前田原古墳群等発掘調査概報」昭和四十七年

註7、 一志茂樹「御代田村の古史を探る」御代田村誌編纂委員会 昭和二十八年。

註8、 永峯光一・桐原健「中部山岳」『神道考古学講座』第二卷所収。

金井重道・望月政治「望月氏の歴史と誇り」日本出版貿易㈱、昭和四十四年。与良清先生の御教示によれば平安時代中期になれば、佐久平に栄えた古氏族、滋野氏系族の定着は当然考慮してもよいといわれる。

註9、 茂木雅博「浮島和田古墳群第一次調査概報」『茨城考古学会誌』第二号、昭和四十四年。
吉岡康暘「古墳時代における特殊円丘遺構」『石川県考古学研究会誌』第一四号。

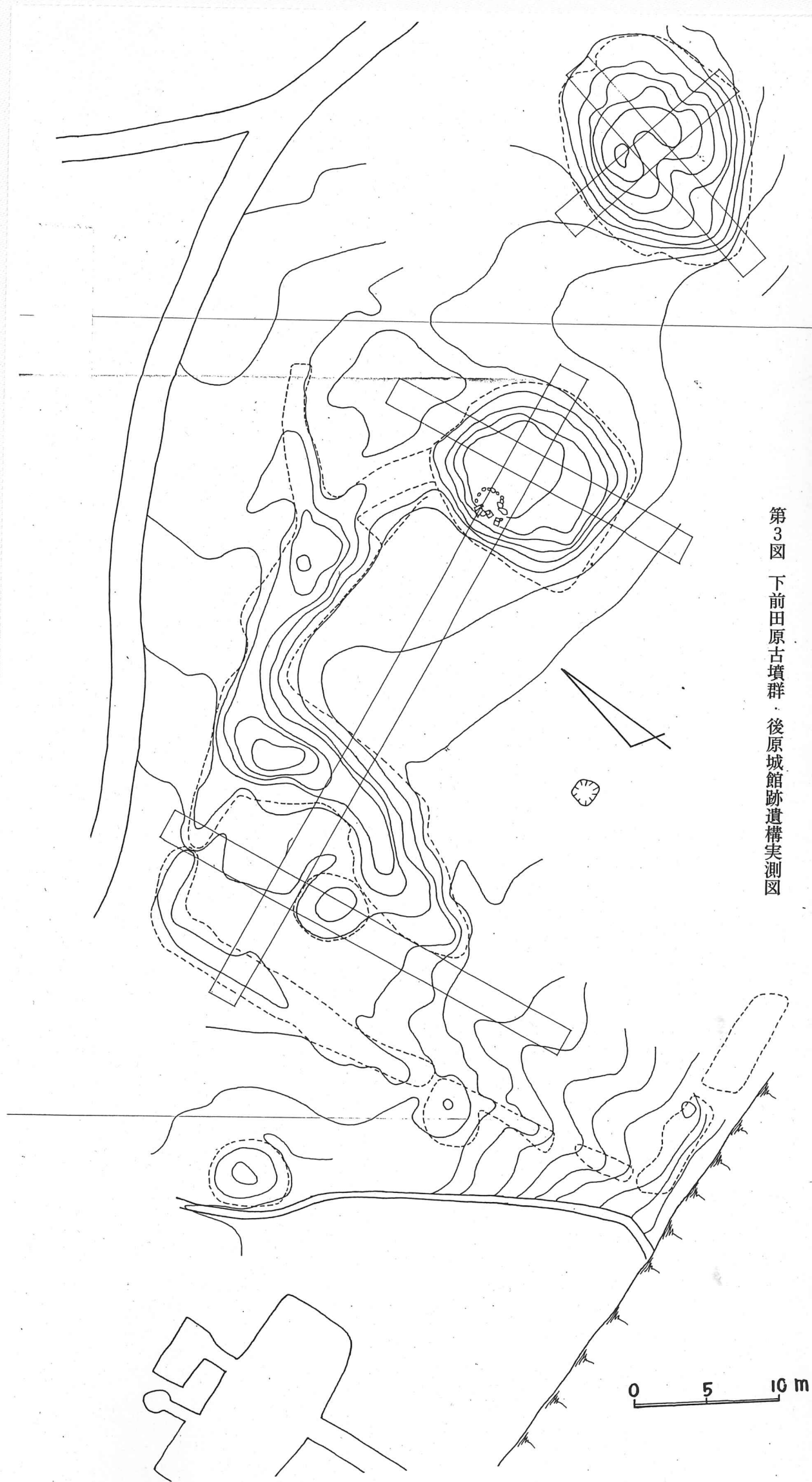
昭和五十年三月十日発行

編集兼発行者

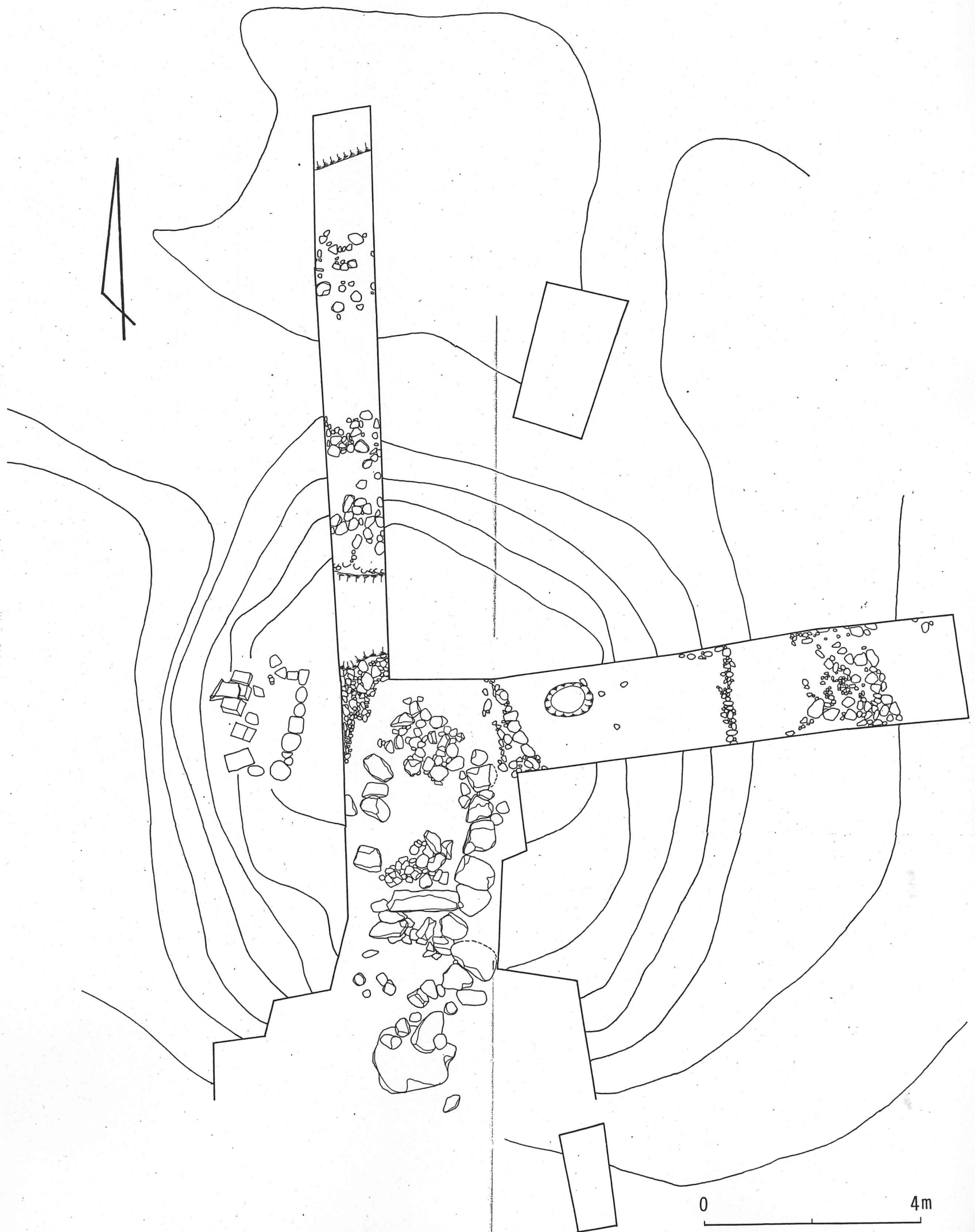
佐久市教育委員会

印刷者

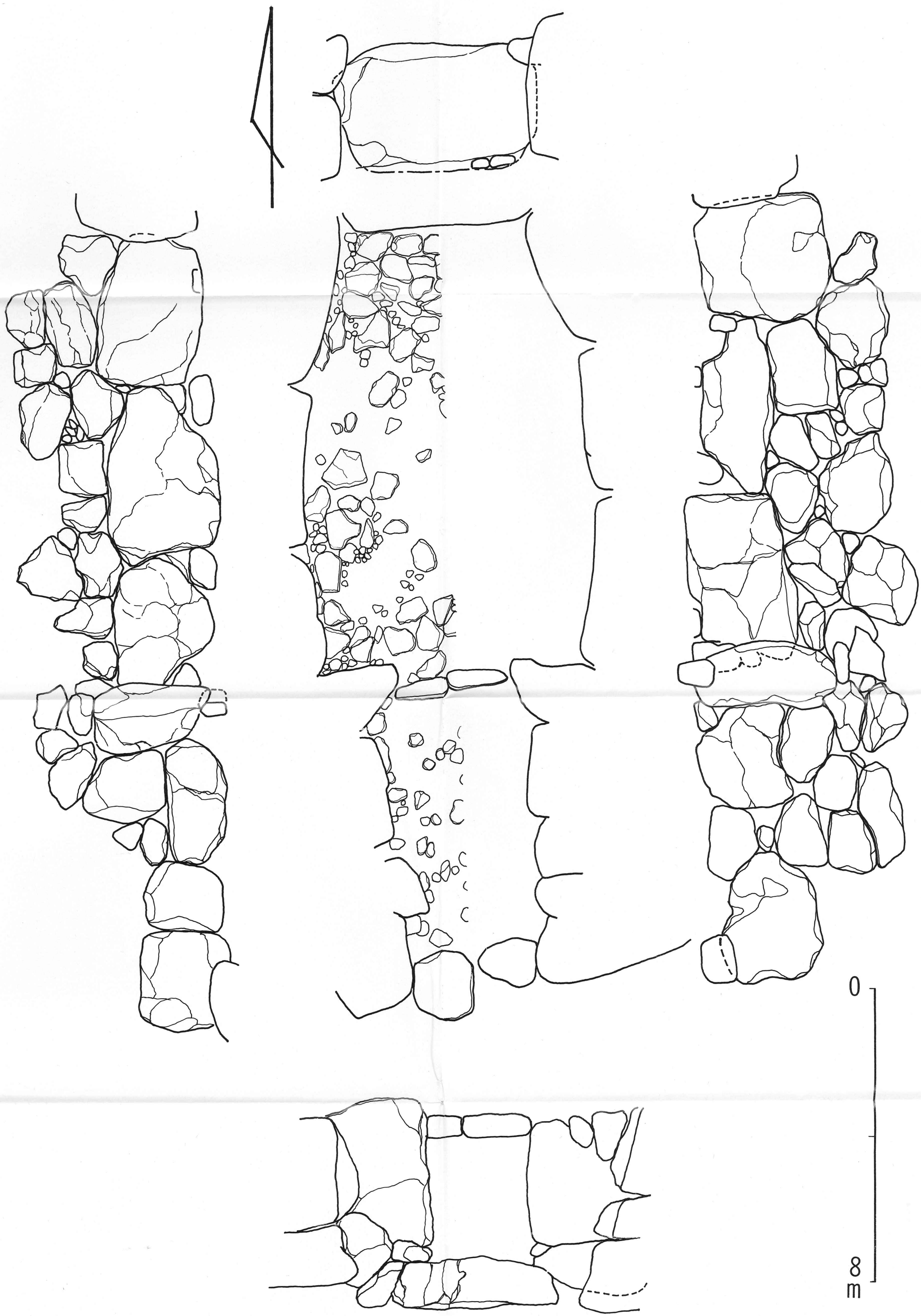
㈱ 佐久印刷所



第3図 下前田原古墳群・後原城館跡遺構実測図



第4図 下前田原古墳群後原2号墳墳丘実測図(1:40)



第5図 後原2号墳石室展開実測図(1:40)



第6図 後原2号墳人骨出土状況(1:40)